

# 沖縄を手がかりとして (1)

— 沖縄戦についての記述を巡って —

Hint from Okinawa (1)

升 信夫

桐蔭横浜大学法学部

(2011 年 9 月 15 日 受理)

異文化間の軋轢は人間の歴史とともに古い。ただそうした衝突は、これまで多くの場合、集団の間のものであったが、近年のグローバル化の進展で、生地文化を携えて遠方の地域に移住する人が増え、現代での軋轢は、個人と集団、或いは個人と個人のものとなり、その様相は複雑で多様化している。都市中心部に向かう電車に乗り込むと、周囲に見いだされるのは、褐色の肌の人たち、スカートの女性、理解できない言葉を話す人々ばかり、ということになったら、どのような気分だろう。それは、ヨーロッパの少なくない都市では、すでに現実のこととなっている。

これに対して日本の場合、影響力の中心である首都圏で暮らしていると、そうした多文化の問題は、日常の問題としては捉えにくい。もちろん、日本にも地域によって様々な文化があり、例えば、ご当地 B 級グルメのように、地方では首都圏と随分異なる食文化が存在していたりする。だが、それらの文化は、単一民族、単一文化という共通理解のもとに、鑑賞されたり、消費されたりする対象としか認識されず、潜在的に抑圧関係を伴うものとは一般に考えられていない。こうして多くの人にとっては、多文化問題といっても、それは

海外で盛んに論じられている学術的（抽象的で日常的でない）問題であり、コミットすべき現実の問題ではないのだ。

ちなみに、コミットするものとして対象を捉える、ということの重要性は、十分に力説しておく意義がある。例えば、子どもの頃に聞かされる盲人と象の喩えを考えてみよう。幾人かの盲人が象に触りつつ、その動物がどのようなものであるか語るのだが、それぞれの描写はみな部分的であり、象の実像とはかけ離れている、というものだ。この話では、個人的な経験にこだわるのではなく、むしろそれを捨象して、象について客観的な姿を認識することが望ましいということが主張されている。しかし、離れたところから象の形象を視覚的に認識することができても、象を覆う表皮の硬さは、近寄って触れてみなければわからないし、その臭いを遠くから感じることはできない。象が遠望すればよいだけの存在であれば、象の形象についての知識と、表皮等についての知識は、知識の量的違いにとどまるが、同一空間を共有して、象に何かコミットしなければならぬなら、その違いは質的な違いになる。ある事柄にコミットする場合、その事柄について個人的で具体的な体

験に基づく認識が不可欠のものとなるからだ。多文化の問題は、日本の首都圏に暮らしていると、遠景として象を眺めるのに似て、自分と係わりのある事柄としては、なかなか捉えにくい。そうした中、沖縄に目を向けてみると、状況は少し違って見えてくる。この時、沖縄に目を向けるというのは、芸能でも、食文化でも、3Kといわれる経済状態でも、何か興味を持てる事柄に眼を向けてみるということを意味している。例えば、アメリカ統治下に活躍したボードビリアンである小那覇舞天の漫談や、照屋林助のワタブショーに耳を傾けてみるということでもよい。小那覇舞天の古い録音は「ブーテン笑いの世界」として、CD二枚にまとめられているが、その冒頭の「金色夜叉」は、寛一を小祿の言葉、お宮が糸満の言葉で掛け合うという趣向になっている。言葉がわからなくても面白いという不誠実な紹介もあるが、これを聞いていても、沖縄の言葉を理解できないと、何を語っているのか全く分からない。だが、これを耳にしていると、明治期以降の国家統制された教育が、沖縄の文化をいかに力をもって標準化してきたのかの一端を了解できる。なるほど、沖縄の言葉と本土の言葉は祖型を同じくする言葉であると理解され、またそのことが沖縄が日本に統合されている理由の一つともなってきた。だが、祖型が同じといっても、沖縄の言葉と本土の言葉との関係は、ドイツ語と英語の関係に類似しているという程度である。ドイツ語と英語が同じゲルマン語系に属しているからといって、同じ国家を形成するのが自然だと論じる人はいないだろう。そのように沖縄の言葉と本土の言葉との隔たりは大きいものであったのだが、現代では、古い沖縄の言葉は若者達の間では失われ、ブーテンの漫談も、若い人には理解できないという。実際、現在演じられている「お笑い米軍基地」のコントのほぼ全ては本土の言葉によっている。その是非はさておき、ここには中央の国家が文化を標準化してゆく実態が鮮やかに示されている。そしてそれは中央の暮らしの中

では、なかなか感じるとることが出来ないことでもある。

こうして、沖縄には、懸案となっている事柄だけでも、米軍基地の問題、本土との経済格差の問題、癒しの島という本土イメージと実際との落差など様々な事象があり、それらの一つ一つが、首都圏で生活しては看取しにくい事柄を含んでいる。そしてこれらの問題を考えてゆくことは、私達が世界の諸問題にコミットしてゆくための手がかりを与えてくれるとあってよい。いわば、沖縄は、私たちが世界を見るための窓ともいえる。

本稿では、まず沖縄戦を巡る記述を取りあげてみる。沖縄戦を取り上げるのは、一つには、実践に係わる事象認識ということについて、沖縄戦の記述が重要なヒントを与えてくれると思われるからである。ただ、それと並んで、或いはそれ以上に重要なこととして、沖縄戦は、その前後の歴史過程と深く係わり、現在の沖縄の有り様を大きく規定していて、沖縄戦を抜きにして沖縄について記述することは難しいと思われるということがある。確かに、岡本太郎『沖縄文化論』のように、アメリカ統治下の沖縄を取材し、沖縄戦について触れることなく沖縄文化の核心を捉えようとする試みがあることは事実だ。しかし注意しなければならないのは、岡本太郎が、第二次大戦開戦期をパリで過ごし、帰国後、応召して中国戦線に送られ、敗戦後しばらく抑留生活を送るという戦争体験を経ているという背景だろう。戦争体験の痛みを共有しているからこそ、沖縄戦の直接の記述抜きに、沖縄文化について語るという離れ業が可能であった。そうした痛みの共有のない現代の私たちが、岡本太郎に倣うことは出来まい。

沖縄戦は、アジア太平洋戦争末に位置する。米軍は日本本土進行の橋頭堡として沖縄を占領確保することを企図し、まず1944年10月10日、那覇を空襲して灰燼に帰させ、硫黄島の奪取が完了すると直ぐ、1945年3月末沖縄本島に押し寄せた。そしてまず慶良間諸島に

侵攻した後、いよいよ4月1日読谷、嘉手納方面に上陸する。日本軍が、起伏の多い地形、天然の地下壕を利用して持久抗戦した結果、嘉数、前田、シュガーローフなど数々の激戦地では両軍戦闘員に夥しい死傷者がでた。日本軍が5月末に首里城地下の司令部を捨てて南部、摩文仁に退却すると、米軍上陸前の北部への移動を躊躇した民間人も軍を頼って南部に避難した。これ以降は、日本軍の組織的な抵抗は著しく低下し、もはや戦闘ではなく米軍による「作業」であったとも言われる状況となった。この中で、「鉄の暴風」とも形容される米軍の激しい砲撃に一方的に曝された兵員、民間人は、随所に夥しい屍を積み重ねざるをえず、沖縄戦を通じた最終的な犠牲者のおおよその数は、県による推定に従えば、本土兵66000名、沖縄出身軍人軍属28000名、沖縄住民戦闘参加者55000名、一般住民95000名、(米軍12000名)となっている。沖縄住民の犠牲者は将兵を含めると18万人、戦闘協力者を含めた民間人は15万人となる。

## 1. 戦史的記述

この沖縄戦については、1980年頃までにすでに200冊以上が上梓されている。その後も例えば、市町村史編集の一環として体験談がまとめられるなど、現在までに集められた資料は膨大なものになっている。これらの記述については、仲程昌徳『沖縄の戦記』(1982年)が、時代背景を考慮しつつ第1期から第9期に半世紀弱の記述の流れを整理している。また、嶋津与志『沖縄戦を考える』(1983年)は、書き手などを基準として、1. 戦闘経過中心の戦史、戦記、2. 沖縄現地の総合的体験記集、3. 個人及び団体の手記、記録、4. 日米両軍の公刊戦史、5. 日米両軍及び沖縄住民の総合的戦史に分類している。ただ、本稿は、沖縄戦の実像を明らかにすることを課題とするものではなく、沖縄戦についての記述に接する中で、現在の私達に係わる何かが見えてくるのではないか、ということに関心が向けられている。

そうした観点から、沖縄戦の記述について、ディスコースのあり方として、①戦史的記述／大局的記述、②兵士の記述／兵士の目から見た戦争、③住民・民間人の記述、という三つの類型を設定し、検討を進めよう。

まず戦闘の推移に注目して沖縄戦を記述する戦記を戦史的記述と置く。公的な機関が著している戦史としては、米国陸軍省が編集した『沖縄 日米最後の戦闘』、防衛庁防衛研究所戦史室による『沖縄方面陸軍作戦』などがある。こうした公的戦史は、軍事組織、及びその周囲が、その後の戦闘機会でもより望ましい結果を得るための資料を作成することなどを目的として編纂されている。そのため、記述方法もその目的に規定され、各部隊、各戦線での戦闘状況について、主観的と思われる記述を極力避け、事実と思われることの列挙に終始するのが一般的である。

ただ浩瀚な戦史書では、部分により、記述の様態が異なる場合もある。例えば、『沖縄方面陸軍作戦』では、第9章「米軍の沖縄本島上陸前の戦争」は、他の章に較べ著しく主観性を帯びた章となっている。そして集団自決に筆が及ぶこの章では、「この集団自決は、当時の国民が一億総特攻の気持ちにあふれ、非戦闘員といえども敵に降伏することを潔しとしない風潮が極めて強かったことがその根本的理由」(p.252)と分析し、「崇高な犠牲的精神から自らの命を絶つ者も生じた」と書き加え、「特攻をこれ生命としていた青年戦隊長にとって、多数の住民をかかえて、しかも全く準備のない地上戦闘は荷が重かったことと同情される」(p.253)と結んでいる。戦史の記述としては、異色と言ってよい。

これと異なり淡々と戦闘経過が述べられている第12章「首里周辺の戦闘」の記述を見てみよう。例えば、5月はじめ、第32軍が攻勢に転じた際の棚原高地での戦闘について、同書は以下のように記述している。

「天明とともに米軍は伊東大隊に迫撃砲

火を集中して四周から反撃を開始し、各方面とも近接戦闘となった。米軍の戦車も南方から射撃を加えてきた。大隊は多数の死傷者を生じながらも米軍を撃退し、陣地を保持して夜に入った。・・・6日払暁棚原高地に進出してきた米軍を撃退したが、天明とともに、米軍の攻撃は昨日にも増して激しくなり、棚原高地の一角は米軍に占領され、伊東大隊は孤立無援の中に苦戦を続けた。・・・7日零時過ぎ南方突破の態勢を整えた。このとき既に大隊の損害は約250名に達し、残存者は約300名となっていた。第二中隊に至っては、上等兵以下4名健在という状況であった。』『沖縄方面陸軍作戦』p.485

一方、米国陸軍省『沖縄』は、同じ戦闘について、以下のように記述している。

「およそ450名からなる日本兵の一群がふたたび棚原村落と棚原丘陵を奪取した。・・・」『沖縄』p.316 「まず二個小隊を前線に立て、戦車隊で支援させ、棚原に突進して、にわかづくりの日本軍陣地を撃滅した。・・・5月6日の朝早く、E中隊の下方にいた一隊の日本兵が手榴弾や爆雷をもって米軍前線に襲いかかってきた。E中隊は半時間の戦闘で16名の死傷者を出してついに頂上から退却し、下方の崖の方に下がった。ここで生き残った者が隊を編成しなおして、頂上を日本軍に奪われまいと、手榴弾を猛烈に見舞い、つぎからつぎへと手榴弾を数百発も投げつけてやっと明け方までには日本軍を頂上から退却させることが出来た。」前掲書 p.320

先に記したように、こうした戦史の記述では、軍組織の配置、戦闘の過程、死傷者の数字が、天空の俯瞰的視座から整理され、実際の戦闘の状況を地上の戦闘員の目を通じて再現することは企図されない。そのため、古来、

「イリアス」などが、臨場感豊かに戦場の様子を伝えてきたのに比して、ここにはそうした叙事詩性は見あたらない。直撃弾で肉体が四散して死に至ろうと、一発眉間に銃弾を受けて事切れようと、腹部に銃弾、或いは砲弾の破片を受けて、数時間苦しんだ後に死のうと、みなそれぞれ同じ1名の戦死者として勘定される。これを雨という現象にたとえてみよう。雨には、霧雨、時雨、通り雨、豪雨、小雨など、様々な名称がある。そして、どの表現を用いるのかは、傘を持つのか、雨宿りするのか、部屋の窓から見て過ごすのかなど、雨を経験する人々の現在の行動と係わっている。仮に、この違いに目を向けず、年間の雨は〇〇日と単純に整理するならば、それは、ある一つの価値意識に従い、状況を整理してしまうこと、そしてその地域で経験する雨の実際の姿から眼を閉ざしてしまうことを意味するだろう。同様に、戦闘での死に方も、直撃弾による四散死、腹部被弾に伴う失血死など多様だが、その多様性を捨象して戦死〇〇名と単純化して数を計算することは、恣意的な現実の把握方法に他ならない。

翻って考えて見れば、「イリアス」等の叙事詩は、それぞれの世代が、その共同体のアイデンティティを確認したり、他の共同体との争いに向けて心の準備をしたり、或いは時々無聊を慰めるなどの実践的な動機を背景に語り継がれてきた。日本でも、琵琶法師により語り継がれた「平家物語」、或いは戦国時代の武将の様々な物語は、そうした叙事詩的伝統に属している。それに対して、近代戦の戦史は、過去の戦闘を、客観的に数字に照らして分析し、許容できない損害を、味方よりも先に敵方に与える方法について検討するためのものであり、その点で、軍事的目的のためだけに著される一元的で恣意的なディスコースである。

更に、全体を遠景として見るような戦史的ディスコースが軍事目的に限ってもどれほど有効であるのかは検討の余地がある。現場の臨場感を理解することなく作成される作戦指

令は、ともすれば机上の空論に陥り、実践的に限界があるようにも思われるからだ。例えば、作戦の検討を行う作戦参謀達、あるいはその候補生は、多くの場合、戦場から離れた安全な場所において、一人一人の兵士が、どのように命を落としてしまうのかに心を砕くことはないだろう。沖繩戦でも参謀達は、首里城地下壕深くにおいて、米軍の砲撃に危険を感じることもなく、また豊富な物資や辻町の女性たちを周りにおいて悠然とした日常を送っていたと伝えられている。このように現場を理解することのない上からの指令がどれほど有効性をもちうるかという問題は、軍事的な事柄に限定されない広い射程を持った問題でもある。例えば、ヘッドハンティングで突然招聘されたCEOが、ビジネススクールの教えに従いながら、他社での自分の経験と、その会社の業績数字だけを頼りに会社を運営する場合、果たして成功する可能性はどれほどあるだろう。また狭く戦史記述の領域に限っても、近代の総力戦時代であって、兵器の開発程度、生産や兵站の状況、行政組織との関係、住民の動向などに眼を向けることのない戦史は、現実的な有効性を欠く記述ともいえる。『沖繩方面陸軍作戦』は、末尾10頁程を割いて、官民の活動について言及してはいる)

公的な戦史は、資料的な自己規定のためか、一般に作戦の適否などについての記述は避けられている。それに対して市井の専門家や好事家による戦史は、客観性の装いという呪縛はない。むしろ、広く人々に読まれるためには、ある種の興味深さや生き生きとした記述が必要となる。例えば、『帝国陸軍最後の戦い』では、先の棚原高地の戦闘について、「凄絶そのもの」「意気込みはすさまじい」など、多分に主観性を帯びた表現を用いながら、次のように描写している。

「棚原失陥の重大性を知ったアメリカ軍の反撃は、凄絶そのものであった。第七師団の名譽にかけてこの一握りの日本兵

を殲滅しようとする意気込みはすさまじく、連隊は新鋭を交替しつつ息つく暇もなく攻め寄せた。戦闘は10メートルから15メートルの近距離において肉弾相撃ち、手榴弾の投げ合いから格闘まで演ぜられ、・・・この紛戦乱闘場には敵の猛火力もほどこすすべがなく、かくて6日の白昼も大隊は頑として頂上を守り通した。」(p.204)

更に、こうした市井の戦史では、記述者が作戦の適否について判断を下すことになる。『最後の戦い』は、沖繩戦での日本軍を次のように評価する。

「18万の大軍と、1400隻の海軍とを三ヶ月も沖繩に縛り付けた戦果は、真に「絶大」と称して過言ではなかった。・・・敵を100日近く拘束した事実が、戦略的に日本を救った戦果を高く賞揚しなればならない。」p.233

「沖繩の陸上戦闘は軍民一致して戦った日本の最後の戦であった。そうしてその一戦は敗れたとはいえ、日本の名をはずかしめるものではなかった。」p.238

住民を含めた犠牲の大きさを殆ど考慮することなく、抗戦の期間に着目しながら、沖繩戦での第32軍の戦闘全体について、このように評価することは、戦史の記述としては一般的とも言ってよい。このことは、軍事的に一元化されたディスコースでは、軍事的なもの以外の諸価値は捨象されてしまうということを示している。『沖繩 悲劇の作戦』も、次のように沖繩戦を総括している。

「米国の最高指導者は沖繩戦で大きな出血を強いられたことに深刻な衝撃を受け、次に予定されている本土決戦ではさらに多くの米兵の生命を失うことを覚悟しなければならなかった。その結果、これ以上の大出血を恐れたトルーマン大

統領の政治的判断によってポツダム宣言における日本の降伏条件は緩和された。天皇制の存廃についてはノーコメントとし、将来の政治形態は日本国民の自由な意志の表明によるとしたことである。……こう考えをめぐらせば、沖縄戦で米軍に甚大な出血を強いたことが米国の態度を変え、戦争終結を早める大きな要員のひとつとなったことは疑いがない。沖縄軍の血戦も決して無駄ではなかったのである。」 p.364

確かに、沖縄戦の犠牲者は無駄な犬死にであったのか、という問題の立て方をすれば、こうした記述が導かれるのかもしれない。しかし、引き続き検討する兵士の戦記、民間の戦争体験を見れば、そうした問題の立て方をする事自体の問題性が見えてくる。犬死にであったかという問題は、軍事的に意味があったか、という問いかけと等しく、そうした問いかけが、人の生死を軍事的に一元化して扱う軍事的なディスコースなのである。

## 2. 兵士による戦争記録

沖縄戦から空間的、時間的に遠く隔たった現在の首都圏に暮らしていると、公的なものも民間のものも、戦史的記述は、客観的で、大局的で、真実を語っているという印象を与えるかもしれないが、これは冒頭にも触れたように、象の外形をもって象そのものとするのに似ている。確かに、兵士による戦記は、自分がどのような戦争を経験したのかを語り、そのため戦闘全体についての俯瞰的視座は欠けている。しかし、戦闘現場の臨場性は豊かであり、そこで斃れてゆく兵士達は、〇〇上等兵、〇〇軍曹と、個々の名前を持っている。そして、どのように死に至ったのかについての描写も具体的だ。まず、『沖縄の最後』（古川成美著）からみてみよう。

「突如落雷のような轟音と共に私は地面

にたたき伏せられた。迫撃砲の集中砲だ。……丘の蔭に津田少尉が仰向けに倒れ、当番の高田が懸命に傷口をおさえている。その側には大西軍曹が両方の足首を失ったのけぞっている。更に向こうには高井上等兵が脚をやられて悶えている。激しい血の匂い。硝煙の匂い。」 p.67

この書は、昭和22年に刊行されたもので、最も早期の沖縄戦記と位置づけられている。その記述は、自分が経験した戦場と、自分が傷つき捕虜となり米軍に手厚く看護されたことに終始している。そのため沖縄戦全体の推移、さらには沖縄の住民のことは殆ど言及がない。僅かに見られる住民についての記述では、「住民たちは米軍の保護を受ければよい。殺されはしないだろう」（p.122）とあり、著者の意識の中で、住民が沖縄戦の当事者ではなかったことを伺わせている。このことについて、「少なくとも沖縄の戦いを書こうとしたものであるなら、そこで生まれ育ち、生き死にした人々の生活なり、その人々との関係なりが何らかの形でとらえられているのが自然であろう」（『沖縄戦を考える p.27）という批判が向けられるのも至極当然といってよい。

ただ、敢えていえば、古川のこの書は、自分の沖縄戦の経験をそのまま伝えようとしたものであり、沖縄戦全体について語ろうと意図されているわけではなく、そうした観点に立てば、批判は無い物ねだりである可能性もある。著者は、昭和19年に砲兵として福井から沖縄に派遣され、沖縄に到着すると、やがて10.10の空襲、そして4.1の米軍上陸を経験することになる。もちろん著者は職業軍人ではなく、いわゆる一銭五厘で意志にかかわりなく徴集され戦闘員となっている。そうした著者の立場に立てば、沖縄戦が、米軍との戦争以外の何者でもなく、住民が第三者として捉えられていたことはある意味で避けられないことであった。

尚、その後古川は、「あの悲劇の全貌を始終にわたり更に深く掘り下げて記録するこ

と」を目的として『死生の門』を著した。この作品は、八原博通高級参謀（作品中は三原）を主人公とし、参謀の視点を通して沖縄戦を描くことで、沖縄戦全体を描くことが出来るという見通しに基づいていた。その企ての成否、適否についてはさておき、これは、兵士としての記述から、戦史的記述への変化であった。

更に、兵士による記述を見てゆくことにしよう。

「初年兵の安里は重傷を負ったらしい。「アンマー・デージー」と泣き叫んでいる。・・・溝の中では相変わらず安里が「アンマーデージー」と泣いている。沖縄出身の島袋衛生兵が「あれは、お母さん、大変だと言っているんだ」と怒ったような声で言った。・・・初年兵の安里も陸軍病院へ行く途中、母の名を呼びながら死んだ。」『逃げる兵』p.87

「しばらくすると、ドドドと地響きを立て敵の艦砲が砲列に命中した。・・・破片がかつらぎ一等兵の左背中から肺を貫いて山本一等兵のみぞおちの処へ入り、ウウウとうめいて倒れた。多分心臓をえぐられたのであろう。傷口からは水道の蛇口をひねったように全身の血が噴き出した。・・・しばらくすると田中上等兵が腹ばいになってくるのが見えた。抱きかかえると右腹部が盲管銃創を受けている。・・・砲列に行ってみると火砲の右車輪に直撃を受けていた。小隊長は右の顔半分皮がえぐりとられ、白い齧を出している。一番砲手は右車輪側で木っ端みじんになり、肉片が散らばっている。二番砲手は喉もとに大きな穴があき、今朝の胃の中の食物を吐いている。三番砲手は右肩から左腹をもぎ取られ肺、肝臓を露出している。」『沖縄の慟哭（那覇市史資料編第3巻7）』p.561

沖縄戦での死傷者の多くは、砲撃によるものであった。砲弾が着弾して炸裂すると、弾薬を覆う鉄の外殻は、高熱を帯びつつ、大小様々な形をとりながら周囲に四分五裂する。いわば巨大な散弾銃弾といってよい。小さな破片は銃弾であり、大きな破片は巨大な鎌となって周囲の兵員を襲う。兵士による沖縄戦記には、そうした様子が必ず描かれている。そして兵士は落ちてくる砲弾を攻撃することはできず、砲弾に対しては、常に受動的存在であった。戦場における受動性は、自らの死と繋がっている。砲弾ではなく、退却の描写も、その受動性という点で、類似した印象を与えるだろう。

「射てっ、射てっ」皆血走った眼で前方を睨みながら夢中で引き金を引く。米軍は思わぬ射撃に大声でわめきながら後線の後ろへ引き返す。と、安堵のもまなくもう連絡したと見えて、榴弾砲が上空で炸裂、まっ黒い煙の中から悪魔の舌のような赤い火が閃き、破片がダダダッとわれわれを襲う。・・・匍匐する。弾がプスス土に刺さる。危ない。立ち上がって走る。ピシンピシンと金属の鞭でも打ち鳴らすように弾が耳をかすめる。」『沖縄の最後』p.74

また、米軍側の視点に立った記述にも類似した部分がある。

「事前攻撃にもかかわらず、日本軍の攻撃はスタートから激烈だった。ゼメリカ中尉はクイーンヒルの麓までやってきたところ、斜面の下部に銃撃により戦死した海兵隊員たちの一列に並んだ死体が目に入った。・・・コスター一等兵が斜面を登り出すのが見えた。かれを呼びとめ、コスタが振り向いた瞬間、向こう側の洞穴から小火器が発砲し、コスタの右胸に弾があたり、蝟壺の横に倒れ込んだ。・・・ゼメリカは斜面を駆け上りながら蝟壺に

飛び込み、そこにコスタを引っ張り込もうとした。ムニア軍曹も駆け寄るとコスタの足を持って蛸壺に押し込もうとした。これがムニアの最後だった。下方に位置する蛸壺から見ていた海兵隊員はムニアの目と目の間のご真ん中に弾があたるのが見えた。・・・ゼメリカは再度手を伸ばしてコスタを掴もうとしたとき、側頭部を激しく殴打されたような衝撃を受けた。小銃弾が耳から入り、首の後ろから抜けていったのだ。『沖縄シュガーローフの戦い』 p.122

ただ、もちろん、兵士たちによる戦記には、常に受動的な存在である民間人の戦記とは違って、敵方を攻撃する様子も描かれている。

「闇の中で岩佐に合図した。照明弾が燃え尽きて少し暗くなった。その瞬間、二人の敵歩哨におどりかかり、左手の刀で背中から突き刺した。「あああ・・・」と声を出して倒れるのを、右腕にささえた。重く温かい体を下におろしながらそっとあたりを見回した。』『沖縄戦に生きる』 p.150

「あっという間もない速さで対戦車爆雷をもったまま戦車に突っ込んだ。轟然と火柱が上がった後、戦車がぐんとなって動かないようだ。・・・やったぞ。知念二等兵の肉弾攻撃成功。」前掲書 p.187

砲弾を受け、傷つき死んでゆく兵士は、戦記では、名前を持ち、それまでの人生を生き、血の通った人間達として描かれる。それに対して攻撃をする際、その銃弾、刃に倒れる敵方兵員は、名前も顔も伝えられない匿名的存在となる。或いは攻撃の際に死んでゆく味方の戦闘員についても類似する。「やったぞ、知念二等兵の肉弾攻撃成功」というとき、知念二等兵の肢体は四分五裂しているに違いない。しかし、記述では、その死よりもむしろ戦車が擱坐したことへの喜びが勝っている。

それは特攻機の攻撃で沈没する敵艦を見て喝采あげるのと共通する。命を失う特攻隊員への合掌に、轟沈する敵艦への喝采が先んじてしまうのは、戦争の常ということなのだろうか。

### 3. 住民／民間人の戦争記録

戦闘員ではない人たちは、荷役作業等への動員、戦場下の劣悪な環境、そして砲撃の中を逃げまどい、一方的に殺傷される存在である。そうした民間の人たちの受苦が、戦争記録の中でどのように描かれているか見てみよう。

「二三本のサトウキビをかついで壕に入った瞬間であった。轟然と直撃弾が洞窟の入口に破裂し、硝煙が壕に立ちこめた。「当美ちゃん、私の脚がないの」と牧志さんが叫ぶ。ふりかえると、大腿部からすっかりもぎとられて血だるまになって横たわっていた。古波蔵さんは寝たきりで息が絶えていた。比嘉さんは胸部、知念さんは目を射貫かれ、神田さんは足、・・・二十余名の血が岩壁や私達の顔や腕、もんべとあたり一面に飛び散っていた。』『沖縄の悲劇』 p.234

「その凸凹の地上に人間の手、足、或いは脚のない腹部、曝け出された臓物、そういうものが散乱している。多分、土砂とともにいったん空中に飛散し、再び落ちてきたものであろう。これが一瞬前まで自分達と同じ肉体を持ち、同じ心を持って生きていた人間の姿とはどうしても思えない。・・・下手なバイオリンをわめかせては、自室は勿論、隣室から寄宿舎中の者の耳をふさがせては喜んでいた安慶名。戦場であろうと、何であろうと、見境もなく、いつも銀歯を覗かせてユーモアたっぷり、大仰な身振りで話をしては皆を笑わせていた彼・・・あの



雪崩落ちた砲撃の瞬間を境にして、彼らは忽然として私達の前から姿を消してしまった。』『沖繩健児隊』 p.43

「壕の壁には銀灰色に見える大脳の一部や人間の他の部分を示す赤みを帯びた物質が点々と散っていた。彼女は貞子の頭のあたりに立ち竦んだ、白い柔らかいものが頭から流れ出しており……。』『生け贄の島』 p.147

「痛い？ 和子はよし子の脇腹から吹き出た夥しい量の内容物を三角巾で覆いながら精一杯のさりげなさで尋ねた……。よし子の唇は、乾いて縮んでいた。そのミイラのように寸法の短くなった唇の下からは、異常に大きくはみ出した嚙に似た銀歯が虚空を噛み砕くように、がちがちと震えていた。」前掲書 p.233

「正子は至近弾の爆風を受けて壕の壁が崩れ落ちた瞬間から完全に正常な判断を失った……。母は上の姉を抱き、下の妹の体を揺すった。しかし二人ともすでに瞳孔は開いたままだった……。兄は胸と右手を破片でやられていた。妹の脚は左右の大腿部が骨折していた。祖母は腰に大きな傷跡が見えた。叔父は右足を破片で折られていた。」前掲書 p.239

「生まれて九日くらいしかたたない赤ちゃんは、まもなく栄養失調で亡くなりました。それから三日たってそこにも砲弾がどんどん落ちてきたわけです。そして次男 11 歳と四男 6 歳が亡くなりました。四男は長女が抱いていましたが、弾の破片が四男の背中を貫通して長女の膝に当たっていました。次男は小便をしたいと外に出ようとしたとき、出て行くと同時に弾の破片が当たって即死しました。……。収容所の病院で長男は足の傷の出血のために亡くなりました。三ヶ月くらいしてから長女の膝はひどく腫れてそのために亡くなりました。』『沖繩県

## 史 9 沖繩戦記録』 p.450

身近なものを永遠に失ってしまう悲しみ、その喪失の責任の一端が自分にもあるかもしれないという痛み、それに加え、何かが少し異なれば、そこで手脚が四散したり、内臓を露出させたり、頭から血を流しているのは自分だ、という意識が、こうした民間人の戦記にはある。『沖繩県史 9 沖繩戦記録』は、2 段組で 1000 頁を越える記録だが、そのほぼ全てが、住民の人々の、かろうじて言葉で表現された痛ましい体験談で埋められている。そしてそれは、俯瞰的視座に頼る戦史的記述には決定的に欠落している要素でもある。

ただ、民間人の戦記でも、特攻機についての次のような記述を見いだすことが出来る。

「ここ数日来、わが航空隊は敵艦船を攻撃し、多大の戦果を収めている。皇国の典拠を決する歴史的作戦だけに特別攻撃隊の攻撃もまたすぐ、今宵、その活動を目前に見ることが出来た。遠いため砲戦の砲火も聞こえず突っ込んでゆく機影も見えないが、パットあがる火柱で十分にそれが確認できると話してくれた勇士たちといっしょに山に登って西方海上を眺めたがすでに攻撃は終わっていた……。飛行機もろとも敵艦に命中する特効魂こそ、皇国ならではなしえぬ神技であり、戦勝をもたらす護国の化身である。』『赤い蘇鉄と死と壕と』 p.83

「弾と人間が一緒になって突っ込んでゆく義烈の精神こそ皇国の誇りであり、また皇軍でなければ成すことのできない神技だ。」前掲書 p.96

皇民教育、言論統制の結果、民間人も兵士と似た感性を持つようになっていたのだろう。民間人は、少なくとも 4 月のうちは、全ての時間を砲撃の恐怖の下で暮らす存在ではなかった。4 月 21 日の日記には以下のような記述もある。

「午後7時半ころ、渡嘉敷様、赤田の酒屋から酒をせしめ、戦果があったとホクホクして来壕し、たちまち酒座敷となる。友集まり、兵立ちより、みなが英雄気取りで豪快にほほえむ。信頼厚い千陽先生の本の中もまたホクホクだ。今晚のごときはヤギさんまで登場している。風邪君よ吹っ飛んでくれとばかり、久しぶりのヤギ汁に舌をならし、酒の座の楽しい晩をクシャミの連続で過ごす。」前掲書 p.107

4月の末といえば、首里から数キロの最前線では、連日の激戦で多くの応召兵が命を落としている。それに較べると首里の地下壕は平穏であった。また民間の戦記では、戦地で人々が、一面的に受苦的な存在ではなく、多様な面を垣間見せることも記録している。

「私たちの隣の壕に50代のおやじがいた。摩文仁あたりの土地の者らしいが、家から運んでくるのであろう、味噌や塩を壕の中で商っていた。味噌は農家の自家用らしく、えんどうと大麦でつくったもので、練られず粗い粒になっていて塩気が強かった。味噌が全然手に入らない兵隊も地方民達もこれを買った。飯盒の蓋一杯で5円というべらぼうな値段をだんだんと値上げして7円8円へとつりあげた。」『沖縄の戦場に生きた人たち』 p.119

「道ばたの甘藷畑で三人の女が芋掘りをしていた。三人とも辻町の遊女であった。・・・三人の女達はそれぞれ馴染みの将校に引き取られて「炊事班員」ということで彼らの世話をし、地下壕の奥で一緒に暮らしてきたのだ。彼女たちは食べるものがなくなったのではないはずだが、焼き芋でもほしくなったのであろう。・・・彼女たちがそれぞれ付き添っ

ている将校達も今やすることがない。指揮下にあった兵隊も散り散りになりまた命令することもない。無力になった群盗の頭領のように、1日24時間、壕の中でごろごろ起き伏して、女を相手に死を待つという状態であった。」前掲書 p.127

#### 4. まとめとして

ここまで戦史的記述、兵士による戦記、住民による戦記という類型によりつつ、沖縄戦の戦記を見てきた。それぞれのディスコースより、沖縄戦は異なった様相を呈する。戦史的には、沖縄戦は、ペリリュー島、硫黄島につぐ、持久抗戦の闘いであり、それに係わる実践的な関心は、抵抗を放棄して米軍を上陸させたことの適否、5月初旬の攻勢の適否、また100日に及ぶ戦争全体の持久抗戦作戦の適否に向けられる。一方、兵士による記述に従い、沖縄戦の像を結べば、嘉数、前田、シュガーローフなどの数々の激戦地での戦闘がイメージされ、死と隣接した戦場の有り様が浮かぶ。戦争映画で再現される戦場での死は、軍服が赤黒く染まり、口元から血を流す程度だが、実際の戦場での死は、多様であり、無残でもある。また、住民戦記のディスコースでは、雨霰と降り注ぐ砲弾で親しいものたちの命が失われてゆく像が痛ましく結ばれる。

では、こうした多重的な像の彼方に、単一のリアリティを把握することは可能なのだろうか。沖縄戦については、「個々の体験記をいくら積み上げてもそれで沖縄戦の全体が自然に浮かび上がってくるとは期待できない。・・・戦場体験者の証言を単なる哀話に終わらせないためには、個々の体験から共通項を選び出し、それらを他と比較して特徴点を整理し、その特徴点を太平洋戦争全体の流れに位置づけて歴史としての沖縄戦にまで精錬してゆくことが重要であろう」と論じられる。『沖縄戦を考える』p.86) これは、それぞれのディスコースを包摂しつつ実相を明らかにする記述にたどり着くことが出来る

いう、ある種の科学的な歴史観に基づいている。例えば、『総史沖縄戦』（大田昌秀著）は、それに類似する観点から描かれた沖縄戦史といえるだろう。著者である大田は、高等師範時代に沖縄戦を経験し、鉄血勤皇隊員として戦争に係わった。その鉄血勤皇隊員十余名の体験をまとめたのが『沖縄健児隊』である。そうした住民／兵士の体験を出発点としながら、『総史沖縄戦』は、「沖縄戦の直接の当事者であるアメリカと日本、沖縄のそれぞれの記録をふまえつつ、できるかぎり三者の体験を包括的にまとめることによって沖縄戦の全局面をうきほりにしたい」という意図から、兵士の戦記、民間人の戦記を踏まえながら、戦史的な記述を行うというスタイルがとられ、その複合性を生かすために写真が大量に配されている。

では、多様な視座を包括的にまとめ、全局面を浮き彫りとする中で実相に迫ることはできたのだろうか。個人的には、複数の事柄から成り立ち、その輪郭も必然的に曖昧な出来事について、万人から等しく見えるような客体化されるリアリティとしての実相は、そもそも存在しないと思う。或いは、とりわけ社会的な事象については、人の認識というのは、もともとそのようなものだ。多様な視座、事柄は、個々別々の存在であり、それを一つの出来事として記述するのは、あくまでも、ある価値の選択にもとづいて成り立つ実践的、或いは目的的な行為である。『総史沖縄戦』についていえば、それは、1982年という冷戦が持続していた時代にあって、著者の「現在の危機的状況にたいし、腕をこまねき、適切な対応をしないまま再び戦争の勃発を許してしまうなら、それはたんに日本国民自体の不幸にとどまらず、人類すべてに絶滅的打撃を与える結果になることを洞察して欲しい」という実践的意図にもとづいていた。

複数の視座、多様な事柄を一つにするのは実践的な行為だ、ということは、逆に言うと、多様な像は多様な像のまま存在するが、実践的な問いかけの中で、それらの像は切り結ぶ

ということを意味している。大田の場合は、愚劣な戦争を繰り返してはならないという問いかけであり、おそらくそれもあって、その書は、戦争の原因とプロセスを戦史的に記述し、最終第三部では、集団自決や壕内外での日本軍による住民殺戮を告発するというまとめに至っていた。しかし、現代は近代戦の危機が目前に迫っている状況ではない。そのように相対的には平穏な状況の中で住民の戦争記録を読む時、強く印象に残るのは、住民の犠牲者の多くが、砲撃や壕への掃討攻撃を原因としていたこと、そしてそれが軍の南部への撤退の後に生じていることである。

この時、5月末なぜ司令部は南部に撤退するという判断を下したのかという疑問が生まれる。4月の上陸以来、既に持久抗戦は二ヶ月余りに達し、米軍にも想定以上の損害を与えていた。5月はじめの攻勢に失敗したことで、戦力は著しく低下していたが、まだ幾日かの抵抗の可能性は残されていた。南部に退却しても、圧倒的な戦力差から組織的な抵抗は困難であり、また十分な抵抗陣地の形成も出来ない以上、ほぼ一方的に制圧されてしまうことは確実であった。更に、南部に退却すれば、住民を砲弾の暴風に殆ど無防備で巻き込むことは明らかであった。住民、負傷兵のみを南部に避難させ、首里城に立てこもって玉砕（降伏）すれば、沖縄戦の悲劇のかなりの部分は生じなかったに違いない。

この世界は多層、多様な事柄から成り立っている。そしてそれぞれの層は、相対的に独立して進行している。だが、ある局面で、それが突然係わりを持つものとなり、実践的な判断を迫る場合がある。例えば、先の原子力発電所事故についても、それまで別次元に存在していた電力の供給、電力会社の利益維持、住民の生活、国民の安全といった事柄が、震災と津波という状況の中で一気に切り結ばれた。沖縄戦についていえば、米軍上陸に際して水際で抗戦するかどうかという問題は、ほぼ軍事上の問題であったし、5月はじめに攻勢に転じるかという問題も同様である。しか

し、5月下旬、南部に撤退するかどうかの問題は、単に軍事上の問題にはとどまっていなかった。

高級参謀八原博通は、撤退について、「一般の情勢より判断して、喜屋武半島に後退し、新しい陣地に拠り、最後の抵抗を試みるのが軍の根本目的に照らして妥当であるとの印象を強めつつあった」と記している。『沖縄決戦』p.287) 軍の根本的目的とは何かは明瞭ではないが、少なくとも軍事的な次元でのみ撤退が考えられたのは明らかだろう。八原は、首里複郭案、喜屋武半島撤退案、知念半島撤退案を提示しつつ、砲兵を收容しきれないことで首里案を退け、天然洞窟が陣地としても兵の收容にも適しているとして喜屋武半島撤退案を主張した。持久抗戦という軍事的論理によってのみ思考していた八原は、どのような事柄についても、それがもたらす抗戦の日数の増減という基準でのみ判断を下したのだ。ここには、軍事的ディスコースでしか対象世界を語るができない軍官僚の自己完結的な姿が際だっている。そして司令官も、参謀長も、これを超越する複眼的な実践判断を下す能力は備えていなかった。(また戦史家も、先に引用したように、この撤退によって一ヶ月も抗戦が持続できたことで、撤退を肯定的に受け入れている。)

ではなぜ、複眼的な実践判断を下すことが出来なかったのだろうか。その理由としては、巨大な官僚組織である軍隊では、そうした判断能力は求められないということも挙げられるだろう。更には、複眼的な実践判断は、戦闘の現場、砲撃の状況、兵員の状況、住民の状況などを、現実のものとして掴んで始めて認識できるのに、首里城の地下壕で殆ど安穏とした生活を送ってきた軍首脳には、そうした現場感覚が欠けていたということも指摘できる。例えば、八原博通は、生き残って戦後に書き著した自己弁明の書で、「まだいくらでも兵員はある。とにかく頭数は相当数あるのである。軍砲兵隊、高射砲部隊、通信部隊、築城部隊、兵器廠、貨物廠、防衛召集者等々、

兵器の大半を失い、あるいはその本来の任務が著しく軽減した部隊の兵員を、直接戦闘任務につかしまればよいのである」と、狂気の域に達したかのように、平然と書き綴っている。このうち防衛召集者というのは、17歳から45歳の住民を1945年2月になって突然、強制的にかり集めたものであり、また10代半ばの学生も通信部隊、築城部隊に配置されていた。軍事的に一元化された論理では、人が具体的な豊かさと多様性をもってその日々を生る存在であるということコード化出来ない。

ただ最終的に残る重要問題として、重大な岐路に立ち、複眼的な実践判断を求められたとき、その判断は何に基づかせたらよいのかということがある。沖縄戦についていえば、住民の生命財産、軍事的勝敗、戦闘員の損傷度などを前に、どのような基準、判断能力に基づいて判断を下すのか、ということだ。それはカント的な実践理性ではないだろうし、経済学的な功利計算でもないだろう。その判断を根底的に支えるのは、その共同社会が育んできた共通感覚的なものではないかと思えるが、それについての検討は別稿に譲りたい。

#### 参考文献 (発行年は各書の奥付の記載に従う)

- 池宮城秀意『沖縄の戦場に生きた人たち』サイマル出版会 (1982年)
- 石原昌家『沖縄の旅・アブチラガマと葎きの塚』集英社新書 (2000年)
- 伊藤正徳『帝国陸軍の最後4』光人社NF文庫 (1998年)
- 稲垣武『沖縄悲遇の作戦』光人社NF文庫 (2004年)
- 大田昌秀・外間守善編『沖縄健児隊』(昭和28年)
- 大田昌秀『総史沖縄戦』岩波書店 (1982年)
- 沖縄タイムズ社『鉄の暴風』(1950年)
- 嶋津与志『沖縄戦を考える』おきなわ文庫 (1983年)
- ジェームズ・H・ハラス『沖縄シュガーローフの戦い』光人社NF文庫 (2010年)

曾野綾子『生け贄の島 - 沖縄女生徒の記録』文  
春文庫

曾野綾子『沖縄戦・渡嘉敷島 集団自決の真実』  
ワック (2006年)

富里誠輝『赤い蘇鉄と死と塚と』サンデー新書  
(昭和38年)

仲程昌徳『沖縄の戦記』朝日選書 (1982年)

那覇市企画部市史編集室『沖縄の恸哭 戦時編』  
(昭和56年)

仲宗根政善『沖縄の悲劇 姫百合の塔をめぐる  
人々の手記』おりじん書房 (1974年)

古川成美『沖縄の最後』中央社 (昭和22年)

古川成美『死生の門』中央社 (昭和24年)

米国陸軍省編『沖縄 日米最後の戦闘』光人社  
NF文庫 (2006年)

外間守善『私の沖縄戦記』角川書店 (平成18年)

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書沖縄方面陸  
軍作戦』朝雲新聞社 (昭和43年)

森山康平『図説沖縄の戦い』河出書房新社 (2003  
年)

八原博通『沖縄決戦』読売新聞社 (昭和47年)

山本義中『沖縄戦に生きて』ぎょうせい (昭和  
62年)

吉村昭『殉国』文春文庫

琉球政府『沖縄県史・沖縄戦記録』(1971年)

渡辺憲央『逃げる兵』マルジュ社 (1979年)